

縮小社会像の検討

中西香 著『衰退する現代社会の危機』の第 11 章「縮小社会訪問記」について
 ……主に農業分野からの意見を記述……

青野 豊一

1 章から 10 章は、題名の通りの「衰退する現代社会の危機」について書かれている。巨大で多国籍化している超国家企業の犯罪的な支配構造を、たくさんの図や表で説明している。これは、よく納得でき得る内容であろう。

しかし、多くの人々は、現実の問題を指摘しただけでは、「縮小社会」へと価値観の転換をしない。未来の在り方がそれなりの展望として指し示されないと、そして、その方向性しかありえないと感じないと、意識の変容をしない。これは、階級意識と同じである。労働者であっても、その存在ゆえに当然のこととして、隣にいる労働者との連帯感をもつものではない。ともすると、足を引っ張り自分だけよくなろうとすることが多い。社会の「縮小」を認めても、それで日々の生活の意識が変わるわけではない。自分一人、自分の家族だけの幸せを追及しようとする。社会が縮小しだすと、目先の損得により一層とらわれて、他の人たちの不幸を望む気持ちが露骨に出てくる。

そこで、この本の第 11 章「縮小社会訪問記(グリーン星の人々より)」のような記述もいる。縮小社会像を、はっきりとしたものでなくても、それなりの像として提示することがどうしても必要となる。

今回の「縮小社会研究会」の第六分科会(農業の在り方)と第二分科会(縮小社会の社会像と移行方法)の合同分科会(8/9)は、このことについて討議するよい機会となるであろう。日々の生活の根幹を規定するのは食料の獲得の在り方(農業の在り方とその農作物の交換関係)であるから、ここに、未来社会の在り方を構想する時の根幹となるものがある。

目 次

1. 自給を基本とする社会、「赤毛のアン」の世界
 2. 『衰退する現代社会の危機』第 11 章についての意見
 3. J・S・ミルの意見—経済成長停止社会と、人間的成長について
- 補説 J・S・ミルにとっての「自由」の意味

1. 「自給」を基本とする社会、「赤毛のアン*」の世界

* 1908 年出版、1877-1882 年のカナダ東部のプリンス・エドワード島がその舞台として描かれている。いる。

縮小社会は、これまでアナキストたちが描いていた社会に近いようだ。このよう

な社会は、小生産者たちが寄り集まって生活している。そして、このような自立した地域社会が寄り集まって国家なるものが形作られている。これは、「赤毛のアン」に書かれているような生活実態なのではなかろうか。アン・シャーリーは、田舎の農家にもらわれていく。……。

私は、この物語を、成人して仕事についてから読んだ。それまでは、女の子の読むものとして見向きもしなかったが、……アンのみたむきな生き方に心打たれた。アンの心は、ぐちぐちと日本の近代文学のようにねじれるような思考をしていない。きわめて常識的・表層的な心理描写である。そのために、アンの知性と想像力は「ここではない、どこか」へ自分をつれていくためのものではなく、「いま、ここ」の自分を取り巻く現実を別のものに読み替えるためのものである。このように、読者の心を洗い流す。「私のこと、コーデリアと呼んでくださらない？」と彼女は言った。それは、10歳の時であった。彼女は想像力を駆使して、現実を読み替える術に長けていた。近所の並木道を「喜びの白い道」と名付け、池を「きらめきの湖」と名付け、日常空間をまるで別の空間に塗り替えていく。ちょっとした魔法の遣い手と言えるかもしれない。それがアン・シャーリーだった。彼女の魔法はマシュウとマリラ(年老いた兄妹でありアンの養父母)の灰色の日常をも極彩色に変貌させていく。

さて、私が注目したいのは、ここに書かれている人間関係であり、社会の在り方である。当時の北米大陸における社会は、自立した生産手段を持っている人たちの関係で形づけられていた。これは、私たちの理想とする未来に近いかもしれないと、今思う。この物語は、まだ資本制生産様式のもたらす問題が顕在化していない時代の、そしてそんな地域の物語である。北米大陸ではこれとよく似た内容の物語がいくつか書かれている。『若草物語(1868年)』『少女ポリアンナ(1920年)』『あしながおじさん(1912年)』等が書かれていることから、19世紀と20世紀の初めまでは、今から思えば、現代のアメリカとは異なり、ある種の理想社会的な要素がまだまだ息づいていたのであろう。1929年の世界恐慌までは、……。

●北米大陸の人間類型として、デイヴィッド・リースマン(1909-2002年)の説を補説として提示したい。彼は、アメリカの社会学者である。代表的な著作『孤独な群衆(1950年)』において、現代社会に支配的な社会的性格を「他人指向型」と規定し、それを、「伝統指向型」と「内部指向型」との対比を通して論じている。

この人間類型の対比の説明は、堀 啓造(香川大学)氏が簡単にまとめているので、それを利用したい。引用は、リースマンの『群衆の顔』(國弘正雄・久能昭訳)サイマル出版会 1952/1968)よりしている。これは、長文の『孤独な群衆』に比べてコンパクトにまとめられているので、分かりやすい。詳しくは、堀 啓造氏のホームページを参照ください。

.....
* 下線と斜体は、青野 * それ以外と太字は、堀氏による。

《伝統指向型》

○伝統指向の性格に依存している型の社会では、個人生活の変動は極めて激しく、破局的ですらあるかもしれないが、社会全体の変化は微々たるものである。この社

会の同調性は、個人の生まれつきの性別と身分に由来する特定の社会的役割に限定されているが、若い者に、伝統に対する自動的ともいえるほどの服従を教え込むことによって支えられている。**伝統に対する服従**は、それに伴う報酬とともに幼児においては、その周囲にいる一族の人たちによって、また、おとなになるにつれて、それぞれの性別集団によって教えられることが多い。

○こうして、人は他人からほめたたえられるような、難しい、いろいろな技術を身につけるとともに、その社会のある規範を破った際に、自分の身にふりかかる辱めを避ける知恵をも学びとるのである。こういう社会は、その始原的形態のままでは、今日のアメリカにはほとんど存在しない。

《**内部指向型**》*伝統の束縛のない北米大陸で、はっきりと現れ出た人間類型*

○時が移るにつれて、伝統指向の社会は「たえず強制された慣習への服従」ということよりも、むしろ幼年時代に、両親その他、おとなの権威によって「内面化された規範への服従」に支えられた、新しい型の同調性へと変化していった。指向にかかわるこの本質的变化は、西ヨーロッパやその属領地で、歴史的に新しい社会的役割が生まれてきたことの原因ともなり、結果ともなった。その役割とは、それまでのように伝統的慣習(mores)に硬軟いずれにせよ注意を払うだけでは、とても子弟に対する十分な準備にはなりかねるようなたぐいの、全く新しい役割であった。そこで始めて、**大家族の権威ではなく独自の権威をもった親が出現し**、その子弟に、拡大していく社会が期待するどんな目標をも必ず成し遂げるといふ固い意志を、植え付けるにいたったのである。

* これは、フロイトの理論(エス・自我・超自我)で説明される精神構造そのものであろう。そのため、フロイト学説はヨーロッパではたくさん批判されたが、この地ではすんなりと受け入れられた。

○内部指向型は、仕事、自己、余暇、子供、歴史などに対する姿勢によって説明することができる。だからといってこれらの姿勢には、明確に、すぐ単独で取り出せる基準は一つもない。だが、こういうことはいえるのではないか。内部指向型という概念の中心は、その是非はともかく、**個人の全生活が、ごく一般化された目標—たとえば富、名誉、善、成功—によって導かれている**ということである。このことは、両親やその他の影響力のあるおとなたちと同一視し、彼らを模範とすることにより、早くから植え付けられたのである。人は、この目的の中で、悩みもすれば、目的を成し遂げるために失敗もしながら、とにかく苦心惨憺して努力するものなのである。このような人間の内面は、近代小説のなかでぐちぐちと表現されてきたものである。

○こうした社会では、**人生とは、目的を指向するものであり、その方向を定めるものは内なる声である**ということを疑うものは一人もない。比喩的にいえば、このような人は**ジャイロスコープ(羅針盤)**で操作されている人に例えられよう。そしてそのジャイロスコープは成人によって与えられたものである。そして、青年が人生を航海するとき、職業のうえからも、社会的にも、また彼が遠く代々住み慣れた故郷を離れる場合には地理的にも、青年を安定させるのはこのジャイロスコープなのである。

《**他人指向型**》

○すでに指摘したように、内部指向型の人は急速な社会変動にうまく対処することができるのみならず、その変動を、個人的な目的の達成のために利用することを心

得ている。しかし、その変動が急激すぎる場合には、内部指向型の人の方が他人指向型の人よりも、弾力性に乏しいといえる。というのは、他人指向型の人がかもつ同調性は、成人の権威を受け入れることよりは、むしろ同時代の人たちが抱く期待に敏感に反応するからである。他人指向型の人間は、ジャイロスコープ(羅針盤)で舵をとりながら生涯の目的に向かって進む代わりにレーダーによって捉えられた、手近にある目標(それは常に動揺し、変化するものであるが)に従うのが常である。このレーダーも同じく幼年期に据え付けられたものであるが、両親や他のおとなたちは、いつでも周囲の人々に調子を合わせ、彼に対する親やおとなたちの反応と親とおとなたちに対する自分の反応をたえずにらみ合わせていくようにと教え込むのである。

○こういう他人指向型が増え、それに伴って他人に対する敏感さが増大したのは、現代産業社会の広範囲かつ加速度的な社会構造の変化の結果でもあり、また原因でもあった。その変化とは、「新」中産階級の増大、生産よりも消費に対する関心の増大、子供に対する親の自信と監護力の弱体化、など列挙すれば際限がない。この場合にも、仕事、消費、性、政治、そして自己など、生活の主要な側面すべてに対する新しいさまざまな態度がみられ、性格構造と社会構造の変化を反映し確認している。かくして対人関係の世界は、人間劇の舞台装置としての物質的自然界と超自然界とを、我々の視界から見えなくしている。

○他人指向は、ある社会が衣食住など生存に不可欠な問題はもとより、大規模な産業組織と生産の問題すらがほとんど解決され、少数の有閑階級と広範なレジャー大衆とが、それ以外のことがらに関心を抱く余裕を与えられるようになってはじめてその姿をみせる。このような社会では、いつまでも勤儉(仕事にはげみ、また、儉約につとめること。勤勉で儉約なこと。)の精神と欠乏恐怖観念とにとらわれ、禁欲主義的なピューリタニズムを頑固に守るような消費者は、その存在が否定されるのである。

○子供は自分自身のおかれた位置と自分自身についての評価を自分の力によってではなく、自分のつきあっている仲間たちから与えられているのだ。すなわち、まず学校のクラスメートや先生たちから、さらに仲間たちやそして成長した後には同僚や上役たちから。だが自分のつき合っている仲間たちそれじしんが正しいという保証はどこにもない。そこで、かれはマス・メディアのなかに散りばめられているさまざまな集団を次から次へと気まぐれに歩いてゆくことになる。

○そこでは他人から認められるということが、その内容と一切かかわりなしに、ほとんど唯一絶対な善と同義になってくる。すなわち自分が認められたということは、自分がいいことをしたということに他ならないのだ。

★ここに書かれている「他人指向型」は、北米大陸だけではなく、現代社会の個々人と集団的心理を言い表したものとして、充分納得できることが書かれている。

しかし、日本では、もともと「他人指向型」の人たちが多かった。「内部指向型」の個人など、たくさん出現していない。遅れて近代化を図った明治以来の当時のエリートたちのエートスとも言えるものは、勤勉な学習と労働をもたらしたのは、「内部指向型」の代わりをしたのは、「他人指向型」の「立身出世主義」の世界観であった。こ

それは、遅れて近代化が図られたところに現れ出る特有のものである。

しかし、それは、80年代からの豊かな社会の到来で、一気にくずれだした。後近代社会特有の「立身出世主義」の世界観の影響力が急速に弱まり、先に書かれているような「他人指向型」の傾向が世界でも最もはっきりと現れてきた。「内部指向型」を經由していないために、この傾向はより一層激しく現れ出ている。

この人間類型は、一定のはっきりとした生活規範をもたない、他の人たちによって承認されたいという欲望に突き動かされて日々の行動をしている人たちの様子を表す言葉である。ここでの「他人」とは、それぞれが気にしている想像上の人たちのことであり、擬似的な出来事やメディアに追い立てられている、主体性のはっきりしていない人たちがたくさん出現している現代社会の状況を言い表すものである。この人間類型とは、他の人からどのように思われるかということを中心に考えて行動するのに、現実の他の人たちへの具体的な配慮が薄く、強い自意識があるのに、個々人の内面はまったく空虚である。これは、マスメディアから流れ出る情報に振り回されている人たちの意識状況であろう。

★リースマンは、『孤独な群衆』で、“工業化に成功し、豊かさと利便さに浸った都市生活を享受するアメリカ人の想像力の枯渇と砂をかむようなむなしさ、そして資源と時間の浪費、偽りの人格化、欲求不満と阻害といった特徴を持つ”と表現して、現代社会の問題に警告をしたが、絶望しているわけではない。他者と社会への関係性は、その時代の諸条件や社会環境によって大きく変化するものだから、この条件を変えていけば、よいことになる。

★「内部指向型」は北米大陸で典型的に現れ出たが、これは、近代の経済の成長を背景にした、ある時期に現れ出た一過性の人間類型であろう。だから、この人間類型をそのまま賛美してはならない。だが、未来の縮小社会は、社会の各成員が生産手段を保持している人たちとなっていないとではないであろう。このことは、間違いない。『赤毛のアン』に書かれているような人たちのように。そうでないと、化石燃料の枯渇のため、持っている生産手段で自給しないと生計が成り立たないし、そうしないと格差が極度に大きくなるであろう。また、「自由」の相互承認がのびやかに発展していくことができない。「自由」は、所有しているがゆえに実現できるのだから、…。近代人は、この所有に基づいて生産された商品を貨幣によって市場で交換したことで、相互の人格を尊重する「自由」概念が広まった。でも、この所有が大きく偏ってしまったのが現代である。そこで、富の再分配と、今の所有関係の諸条件を変更して、個性の進展と知性と道徳性の発展がなしえる社会システムにしなくてはならない。

さて、そこでは、どのような人間類型となるのであろうか。リースマンの言う「内部指向型」に近いのであろうか。

2. 『衰退する現代社会の危機』第11章についての意見

以前に、私は以下の点を指摘しているが、それをまず再録したい。→の後の記述は大谷様が書いている。

- ①化石燃料の使用が著しく減退した場合の、農業生産性の著しい低下について

の指摘がない。→ 投入エネルギーと産出エネルギーの考察が有効

②縮小社会における互酬経済の様子が、書かれていない。→ エネルギー減でモノが減るので貨幣価値は下がり続ける → 行き着くところはハイパーインフレ、しかも基軸通貨が機能しないことには收拾つかない → 信頼関係にもとづく贈与経済

③市場経済の役割と、その具体的在り方が提示されていない。→ 現在のような遠く離れたところに暮らす赤の他人の生産活動に依存した心許ない経済がどの程度に機能するか？

④そして、縮小社会への移行の在り方として、「収奪・再分配」を担う国家行政の在り方についても、記載されていない。→ すでに縮小経済が始まっているのに増税していますね。でも、無い袖は振れない。歴史に学べば、闇経済が拡大、ますます増税の悪循環。それで、ローマ帝国崩壊後には方々の封建領主が治めたり、日本でも戦国時代ありましたね。黒田基樹（著）『百姓から見た戦国大名』（ちくま新書）が参考になります。

これらのことについて、以下に詳しく記載したい。

11-1 エネルギー・経済の縮小

1 太陽光パネルの家

・田舎の生活、家の周りにある田畑で野菜と穀物を栽培

都会からの脱出、都市生活者たちの帰農、つまりは、**自給を基本とする生活**

- ・家々に太陽光発電装置を設置(電力の自給)、余剰電力の販売
- ・特許フリーの社会システム
- ・大きな工場の数が二百年前の 1/10、自社の太陽光発電装置で機械を作動
- ・大規模発電所は、この星では数箇所のみ
- ・井戸水を飲料水としている。井戸→風呂と台所→トイレ→田畑の灌漑用水
- ・化学薬品や農薬の廃止
 - ★草の除草と有害虫に対する対策??
 - ★化学肥料??
 - ★肥えた土??有機肥料で栽培??
 - ★農機具の燃料制限?? or 手作業?? or 蓄電機能の向上で、電動??
トラクター、田植え機械、コンバイン、草刈り機、動噴は、稼働するのか?
- ・空気や水の汚れに対する厳しい規制
- ・食料ゴミは、有機肥料化??
- ・休日が 3.5 日、自由活用の時間の増加→自給生活のための労働へ

①土地所有制度は、どのようになっているのであろうか。この説明がない。

②書かれていることから、広い田畑の管理はとてもできないことがうかがわれる。勤務日が一週間の内の半分、3.5 日としても、農繁期はこれではとても追いつかない。

苗や草の成長は、とても速い。田の耕作と除草を適時にしないと、単位当たりの収穫量は大きく減る。そのため、家族の誰かが日々田畑で労働をすることが必要となる。草を刈り取っても、夏の時期は 2 週間で以前の状態となる。害虫が繁殖しだすと、2-3 日で成長点までかじり出す。大きくなれば、多少虫に食べられても大きな問題はない。しかし、植え付けして根を張りだす前は、虫に食べられると全滅となる。この時期は、やはり消毒しないといけない。化学薬品か、それに代わるものが必要となる。

③有機無農薬で米まで自給で作るとなると、農業機械の稼働が難しくなると、田の耕作や田植えや水の管理等は、一つの家だけでは、とてもできないであろう。昔のように隣近所での助け合いが必要となる。こうなると、互酬制が強く機能することになり、個人的自由は大きく規制されてくる。互酬の毒が回り出す。この毒を消すことはできないが、大きな問題にしないようにするには、市場での貨幣による商品交換関係がそれなりに機能していないといけないこととなる。

* 農業機械の動力として蓄電池の技術革新に期待していいのであろうか。これができうのであれば、よいのだが。

④野菜だけを自給して、米や麦等の穀物は、ある特定の地域に栽培を任せることもできよう。そうなると、貨幣による市場での交換 * となろう。また、無農薬・有機栽培のコメ作りとなると、大変な集約労働が必要となる。きつい肉体労働で穀物を作り出すことになる。そうなると、高価な値段の米にしないと、穀物栽培は難しくなる。食費にかかる経費は、当然高くなる。

* この貨幣による交換関係の在り方も思考しなくてはならないであろうが、このことの重要性が記述されていない。

⑤特に、果樹の栽培は、難しい。今の時期の李を例にすると、私は稲のニカメイガやカメムシ対策の消毒をする時、李も一緒に消毒する。そうしないと、虫に葉を食べられてしまう。葉がなくなった枝には秋に花が咲く。こうなってしまうと、李は実らなくなる。収穫量が、極端に少なくなる。これは、広い果樹園での栽培でなくても、庭に植えているのでも、同じことである。消毒しないのであれば、天候条件等で、大きく減収となる。

⑥縮小経済社会でたくさんの雇用があるとは思えない。仕事を相互に分け合ってすることになる。一週間で 3.5 日の労働での賃金では、日々の生活に必要な物資を市場交換で獲得することは難しいであろう。生産性を向上させる技術革新がなされても、国民への分配が十分に配慮されていても、化石エネルギーが残り少ないのであるから、自給の農園で懸命に働かなくては、十分な食料は入手できないことになる。まさしく、「働かざる者、食うべからず!」の社会ではなかろうか。勤労意欲こそが、明日を生きる糧となる。労働しないと、草と虫のために、期待する収益は出ない。自然を相手とする労働であるから、天候等の影響を強く受ける。ビニールハウス等で自然条件を緩和・変更することは、できないであろう。その土地の自然条件に適した作物を栽培していく技術を身につけなくてはならない。そして、それなりの収益を得るには、汗を流して働くしかない。うまくいけば、食卓には、何種類もの食材が並ぶ豊かな食生活となる。

⑦よく働く女たちでなくては、肉体労働を嫌う女たちでは、この自給生活は成り立た

ない。アメリカ風の農家の妻を理想としていては、泥にまみれることを嫌がっている、この湿気の高い温暖(夏は熱帯)な地では、農作物はできない。それは、未来の縮小社会でも、・・・。

2 生活道路から車が消えた?

- ・電車とバスの交通網の整備で、自動車の台数が減る。
- ・自動車が走るのは、高速道路と 8m 幅以上の道路のみ、それ以外の道路は、人と荷車と自転車
- ★多少の不便は当然とする意識、しかし、荷車の動力燃料は、必要である。地面は、どこまでも平らではない。人の移動や収穫物の運搬には、低速の車は必要となる。
- ・森や林が増える。

★今の都会では森や林が増えることを喜ぶが、私の住む田舎では、もう、増えては困る。緑は、あまりにもいっぱいある。玄関から出ると、一面の緑・緑・緑、緑が迫ってくる。ありすぎる森や林は、田畑の作物栽培の害となる。春と夏は生えてきた草の刈り取り、冬は木々を切り取らなくてはならない。日が当たらないと、当然、収穫量が減る。山林の近くの田畑では、この緑の刈り取りが、日々の仕事となっている。場所によっては、増えては困るのだ。放置は、自然の保全とはならない。

電力から熱を得るのは効率がよくないから、木材は燃料として利用するのが最もよいが、化石燃料が減ると、森林伐採がどんどんなされる。戦争中の写真を見ると、私たちの周りの山は、禿山ばかりであった。ここに、大きな問題がある。

★森の中が心地よい?? 森の中は、動物や虫がいっぱい。公園の木々は、たびたび消毒されていることを忘れてはならない。キャンプ地も、周囲の虫は駆除されている。自然は、虫や動物がいて当たり前なのだ。夏の竹林は藪蚊の大群が来るので、入れるものではない。梅雨時には、頭上から、樹木から蛇が落ちてくるのが、森林なのである。自然は、牧歌的世界ではない。

- ・車を使用しての買い物やレジャーは、減少
- ★車や新幹線で観光地に行き名物を食するのが、レジャーではないことは間違いない。自然の中を歩くトレッキング等を私たちも、実践したらよいであろう。車で観光することを減らすことに努めようではないか。遠方まで出かけて花見をするのではなく、近場の桜の地を歩いて巡るのは、よいものだ。小さな自然の変化を感じ取れる。
- ・遠距離通勤が減る。
- ・価値観の転換、金さえあれば贅沢ができ、車を利用できる野放図な考え方は、時代遅れである。自制することを歴史から学ぶ。

★知性と道徳性の向上? これは、難しい。多くの人たちが一度に、大変な困難な状態を体験しないと、・・・そして、特別に無理をしなくても、前時代と比べて知性と道徳性の向上が、結果として現れ出る社会システムを構想することが大切であろう。ヒーローがいなくても、駆動する社会を、そして悪人がいても結果として、大きな悪にならないシステムを!

ホイジンガの『中世の秋』に描かれているヨーロッパ中世末期の人々の知の在り方や感情の表出の仕方等は、道徳性は、現代とは大きく異なっている。だから、私た

ちも、今の私達とは異なる社会意識を、そして人間観を構想することができる。

3.DIY コミュニティ

・自家製の余りものをフリーマーケットで売り出す。

★私の近くの産直市では、品物がなかなか売れない。胡瓜 5 本 80 円で、売れ残る。胡瓜のからし漬けにしても、茄子の漬物にしても、そして南瓜も、売れ残る。他の人たちとは異なった物か、早期栽培や抑制栽培した物は、よく売れる。しかし、他の人たちとそんなに大きく違った物は、作り出されないのだ。よく似た物が、並んでいる。こうなると、安売り競争となる。それと、見た目によい品物でないと、売れ残る。胡瓜は細くてまっすぐでなくては、太くて曲がったのは敬遠される。

このことには、家庭で食事を作る人が減ってきていることも、大きく関係している。スーパーで惣菜を買う人が多い。夕方のスーパーの食品コーナーは、人がいっぱい。そして、外食を当然とする人たちも多い。やはり、大きな価値観の変更がなされなくてはならないであろう。

★余りものの農産物の活用のシステムがいる。自給生活を基本としても、農作物は時期によって必要以上にできすぎたり、時には不足となる。計画通りに収穫できない。そこで、余り物や不作時の不足を補うための仕組みを作り出さなくてはならない。

・商店に置かれている品物は、フリーマーケットとあまり変わらない。生産者が日々品物を置きに来る。工業製品としては、家庭で作り出すための道具が多い。

★商業は、どのようになるのであろうか。自給が基本と言っても、何でも作り出せないのだから、物・人・事の交換関係は大切であろう。この交換関係を通して、人間関係が形づけられているのだから、この視点で、現在と未来の社会を構想しなくてはならない。交換関係の三タイプとしては、以下のとおりである。

A 互酬制の関係

B 市場における貨幣による商品交換

C 収奪再分配

A・B・C それぞれの関係の具体像とその在り方、そしてこの三者の相互関係は、どのようになっているのであろうか??

★社会を観る視点として、この A・B・C の関係を我々ほどの程度理解しているのであろうか。まずは、この視点から社会を把握しなくしはならないであろう。

4.工業製品はどこで造る?

・リサイクルと工業化をうまくつないでいる。

・デパートとスーパーマーケットは大都会にある。そこまでいなくても、テレビショッピングで購入できる。

・大きな工場は、産業別に、立地条件のよい、資源効率のよい地に建設している。

・販売は各会社が独自に競争して行うが、開発した技術は特許フリーで相互に公開している。

★こうなると、安売りサービス競争となる。また、技術開発への社会的圧力が弱くなる。特許フリーでは、特別剰余が発生しにくくなる。技術開発のうまみがなくなってしまう。今の開発競争は大きな問題を含んでいるが、でも特許フリーとなると、技術革

新のテンポは遅くなることはまちがいない。それは、それでよいのである。現在は、儲けに障害となるものは、それが人類にとって素晴らしい発明であっても封じ込められてしまっているから、それに比べると良いことであろう。

・会社は株式会社ではあるが、世界連邦と各国政府が 35%ずつ出資して公共性の確保がなされている。残りの 30%が個人株主。

11-2.弱肉強食を止め人間を大切にす社会

1.わが町の運動会

・大人 1100 人の町で、大人のほとんどが働いている。

500人が農業と小さな工場で作作り、100人は学校(生徒が300人)、100人は幼稚園と託児所、老人施設で150人、医療関係で50人、役所で50人、商店で50人、研究者やその他で50人

★労働忌避者達には、どうするのであろうか。彼らは、働くことを嫌がるのだ。公的な施設で職業訓練を受けることも、拒否する。働かない、学ばない、人と関わることを避けようとする。このような(強制された怠惰*を示す)人たちは、どうしても何割かはいる。アリの世界では、2割が働かないと聞かすが、…。このような人たちがいても、大きな問題とならないような社会システムを作り出していくしかないように思える。現代のような競争社会ではないので、このような人たちがあまり出現しないと予想しているのであろうか。

*他の人との比較の上で、自分が劣等であることを感じつつも、そのことをはっきりとは認めることができず、働かない今の自分の生き方を卑下しつつも、それなりの理由づけをして、この生き方を美しく意義あるものとしている心理状態であろう。劣等意識のねじれた表れなのであるが、その人なりの美意識で裏打ちされているので、言葉で説得しようとしても、どうにもならない。

このような意識は競争社会の中で、どうしても生じてしまう。彼らの日々の生活は、働いている者から見て怠惰そのものなのだ。生活苦を口にするならば働けと言いたくなるのだが、彼らは「年金が少ない」「政治が悪い」等のことを言う。しかし、額に汗して働かない。そして、この世の諸問題を、自分の境遇を、一気に解決してくれるヒーローの誕生を待ち望んでいる。

・賃金は、どの仕事もそんなに高くない。

★貨幣だけによっては、生活に必要な物質の獲得は困難な状況??であろう。

・高校三年で、一年間かけて、社会生活について実習をする。

★自分の適性を、自分なりの人生の「羅針盤」作りの機会?「内部指向」的な人間類型をモデルとしている?

2.ベネビア国民の意思(貧困の撲滅)

・軍隊を解散して、福祉と生活不安の解消のための「国民安全部隊」を編成

・国民の意思—生活習慣病とエイズ撲滅、そして、貧困家庭への食事支援

・他国への支援

・次の目標として一医療費と教育費の完全無料化、失業なしの国家行政

11-3. 幸せのコミュニティ

1. 人参パーティー

・おいしい野菜

★有機栽培で作物が豊かに実るには、土地がそれようになっていないと難しい。土が団粒構造になるには、何年もかかる。また、土地の性質は、所により大きく異なる。砂地 or 粘土地 or 火山灰地等によって、……。そして、その地にあった作物でなくてはならない。また、有機栽培では、草取りと虫取りを一家総出で励まなくてはならない。腰が痛くなる。腰痛の人が増えるであろう。

★自給を基本とする生活では、献立を考えて材料をそろえるのではなく、今ある食材から献立を考えていくようにしなくてはならない。そのためには、料理の腕が向上しなくては、家庭料理の振興なくしては、貧しい食事内容となる。

2. 人々の生活と楽しみ

・化粧品・ダイエット食品・加工食品の売れ行きが落ちている。人々がファッションを追わなくなった。

★このことは、人々が小さな差異を求めなくなったことを意味する。でも、この小さな差異を求めることで人間形成がなされているのであって、これへの関心が落ちることは、各自のアイデンティティの確立への、自己形成意欲の減退であるとも言えるのではなかろうか。社会の中に溶け込む人格の形成をよしとするのか?「他人指向型」の人間でなくなっているとの意味であろうか。

・紙・家具・食器・小物類を各家庭で作り出す。家電商品も、売れ行きが落ちている。
・休日は、外でレジャーを楽しむ。

★農繁期には、休日はない。自然を相手にしていると、他の産業のような定期的な休日はない。私も、4月から10月までは、雨が降らない限り、毎日働く。特に、筍掘りの時期は、雨が激しく降ろうが、早朝から仕事をする。真夏の炎天下でも、田の水の管理のために働くことをしなくてはならない。

★外でのレジャーの例として魚釣りを例として書いているが、自然界にいる魚を捕獲していると、すぐ枯渇する。人々の食事用としては、川や湖でも養殖しないとイケないであろう。このことを職業とする人たちがいて、貨幣を使って交換することとなる。

・山では、山菜やキノコがたくさん採れるようになる。

★これは、大きな間違い。山菜やキノコは、適した場所にしか生えてこない。それなりに管理したところにしかたくさんは生えてこない。ワラビは、春や初冬に草を刈り取っている場所にたくさん生える。それ以外の所では、まとまって生えていないので、採取に時間がかかる。「まつたけ」は、里山に生えていた。落ち葉や小枝の入り混じったのをかき取り田の栄養としてしこんでいたから、山の栄養を少なくしていたから、つまりは縄文の森に比べて栄養的に低かったから、松の木が生えていた。木々の生い茂ったところではなく、日が適当に差し込む少し乾燥した林に「まつたけ」は生えていた。でも、他のきのこは別の条件であり、そのキノコに適した条件に整備することを

しなくてはならない。奥深く山中に分け入るとそれなりに発見できるであろうが、多くの方がそうすると、すぐ枯渇してしまう。やはり、それなりの管理がいるし、専門的な栽培をする人たちがいる。

・都会の会社に勤務する人が減る。儲けを増やす競争は減り、お互いに気遣う余裕が生まれてきた。

★田舎の中小企業や協同組合等に就職しても、賃金は少ない。そのために、農業をしなくてはならない。でも、農業の生産性は、他と比べて低い。だから、これで生計を維持するには、大きな収益を目指さないとしても、頑張っただけで汗を流して働くことが必要である。

3. 子供の生活・教育

・小学校の三日と半日の授業の大半は、学外での実際に役立つ授業

・テストは、ない。点数を巡る競争はない。

★では、その地域外のことは、どのように学ぶのか。自分の居住地外の知識は、教えること必要である。実際的な科目の中で、折に触れて教育していくのであろうが、教え込むことは、どうしても必要となる。例えば、全国の県名とその数は、興味と関心に任せていては、この知識は獲得できない。歴史も、自然科学や数学も、そうである

★小学校時代の実際的な知識の獲得を通じた知識に基づいて、中学より後の教育で教え込むのであろうか。これがないと、人々の知性と道徳性の涵養はできない。社会システムを維持できないことになる。

4. フリーマーケットの町

・木曜の午後から日曜までの三日半日は、休み

★自給生活を基本としていても、田畑で収穫したものは、種類によっては、三日間もすると大きくなりすぎてしまうものがある。そこで、産直市はどこかで開かれていることが必要となる。

・動物たちの楽園

★すずめやシラサギ・・・これは困ったことだ。雀が増えると穀物の収穫が減る。シラサギは田植えをしてまだきちんと根を張ることができていない苗の上を歩き回る。特に、猪・猿には、困っている。山に近い田舎では、何ものを作るにも、猪対策なくして栽培できない。広い平野で作物を作っている人たちから見て、これらは余計な仕事なのだ。でも、これをしないと、収穫はない。

・四十軒あまりのフリーマーケット、商店があまりない。

★何を通して交換しているのであろうか。貨幣についての記述がない。貨幣は必要なのだ。これがないと、例えば、米等の穀物が貨幣の代わりの物となったりする。そうになると、米をたくさん有している者が力を持つことになる。人と人との関係は、このような物・人・事の交換関係で成り立っているのだから。貨幣のもっているさまざまな問題を解決しなくてはならない。

11-4 循環型社会

1.紙を再生する

- ・紙の再生が、家庭で手工業として行われている。

2.洋服のリサイクル

- ・服から糸を、糸から布へと変換させることができる。
- ・低価格で、リサイクル服を入手できる。

3.花園喫茶店(自然との共生)

- ・動物たちの言葉を理解することができる。

4.京都の高校生の夢

- ・地球では、発電機の効率化に成功する。★井出治の理論??

11-5.世界の安全と平和

1.核、原発からの撤退

- ・グリーン星では地下資源はおよそ 300 年で底をついた。悲惨な歴史的体験をして、大量生産・大量消費社会から離脱、自給社会へと転換
- ★縮小社会で、人間の知性と道徳性の発展はありえるのか??
- ★J・S・ミルの意見を参照

2.温暖化の災い

- ・世界連邦の設立、世界市民としての自覚
- ★悲惨な体験を通して、世界連邦政府の成立??
- カントのいう世界市民としての自覚??

3.バクッシュ平和賞

- ・大国の経済力の衰退で、...核兵器の廃絶

11-6.政治・経済制度の転換

1.バリンナ農園(途上国の自立とフェアトレード)

- ・生産・消費生活協同組合の発展
- ・先進国有利の歴史の歯車が逆転し始めた。
- ・一次製品の値上がりで、途上国にとって地位向上のチャンスとなっている。
- ・資源の有効活用、人類の生存確保が、政治のテーマ

2.サハラ砂漠を緑の大地に(多国籍企業への正当な課税)

- 地球では、
- ・多国籍企業の脱税に対して、重加算税
- ・この資金をもとに、サハラ砂漠の緑化計画が推進されている。

3.J・S・ミルの意見—経済成長停止社会と、人間的成長について

J・S・ミルの文章を参考資料として掲載する。*『経済学原理』(1852年第三版)

すべて分量に限りがある自然的要因は、その究極の生産力に限りがあるのみならず、その生産力の極限に達しないよほど前から、すでに追加需要を満たす条件がますます悪くなる。

もし富と人口との無制限な増加のために地球がその楽しさの大部分を失ってしまわなければならないとすれば、しかもその目的が、ただ単に地球をして、より大なる人口—しかしけってよりすぐれた、あるいはより幸福な人口ではない—を養うことを得しめることだけだとすれば、私は後世の人々のために切望する、彼らが必要に強いられて停止状態に入るはるか以前に、みずからすすんで停止状態に入ることを。

100年以上をへて、ミルの定常状態論に人類が地球規模で直面していることを指摘したのが1972年のローマ・クラブ『成長の限界』だ。その中に、ミルの次の言葉が引用されている。

資本および人口の停止状態なるものが、必ずしも人間的進歩の停止状態を意味するものではないということは、ほとんど改めて言う必要はなかろう。停止状態においても、あらゆる種類の精神的文化や道徳的・社会的進歩の余地があることは、従来と変わることなく、また、「生活の技術」を改善する余地も従来と変わることはあるまい。そして技術改善の可能性は、人間の心が立身栄達のためにうばわれることを止めるために、はるかに大きくなるであろう。

当時のイギリスでは、産業革命と植民地の拡大に成功していた時で、急激に物質的な豊かさを享受していた。労働者階級の人たちも、その豊かさの恩恵を受けだしていた。また、それまで自由主義を掲げて地主階級と闘っていたブルジョワジーたちは、急速に保守化して、貴族たちの生活態度を模倣するようになった。

でも、繁栄の陰の部分として、貧富の格差も急激に進んでいた。もはや古典派が主張してきた「自由放任主義」は行き詰まっていた。まるで現代の日本というか、グローバル化した世界経済の状況そのものであろう。今盛んに言われている新自由主義も決して「新」ではない。これは、資本の秩序に従う世界を再編しようとしているための規制緩和であり、「自由放任主義」であろう。

脱成長論には様々な系譜があると聞く。一つの源流はJ・S・ミルが1848年、『経済学原理』で書いている「定常状態」論だろう。ここでミルは人間の経済はやがて成長を終え定常状態に達すると論じたが、興味深いのは、人々はそこで真の豊かさを得るというポジティブなイメージを彼が提起していた点である。ミルの論は、当時は今

と比べてなお農業の比重が大きく、一国内の「土地の有限性」を意識したものだったが、19世紀の後半、重工業が国家行政の支援を受けて展開されて、植地を含む自然資源の収奪がさらに本格化するなかで、ミルの定常状態論は経済学の主流から忘れられていった。

今、モノがあふれる時代となって現代の先進諸国は構造的な「生産過剰」となり、“失業問題を需要拡大と経済成長によって解決する”という方法が限界に達し、他方で長時間労働が慢性化している。私たちとしては、賃金労働を減らしそれをコミュニティや自然に関わる活動に変えていくことが重要だと思われるが、…。旧来の経済学者たちは成長を図ることを目的として、自らの地位を改善しようとして、互いに人を踏みつけ、押し倒し、押しのけ、追い迫ることこそ、最も望ましい人類の運命であるとしてきた。アダム・スミスは、『国富論』(1776年)に次のように述べている。

労働貧民すなわち人民の多数が最も幸福で、最も安楽であるように見えるのは、社会がその富を十分完全に得た時よりも、むしろそれが進んで富を得んとしておるとき、すなわち進歩的な状態にあるときである。社会が停滞的な状態においては、彼らの生活は困難であり、退歩的な状態においては悲惨である。進歩的な状態は、実際において、社会のあらゆる階級にとって愉快的楽しい状態である。停滞的なのは活気がなく、退歩的なのは憂鬱である。

* スミスがこの本を書いたおよそ100年前の当時は、各私有の工場と生産協同組合との規模や経営内容は、あまり大きくは変わらない程度であった。工場の所有者が社長であり親方であった。労働者たちとの交流もあった。労働者たちは、親方を通して基礎的技術の習得をしていたのだ。

ミルは、この見解に反論している。スミスの本の出版からほぼ100年たってミルは、経済発展が停止状態であっても自由が十分に配慮されていれば、知性と道徳性の向上がなし得ることを説いている。ここに期待した。経済的繁栄よりも、人間的発展を希求した。物質的な発展という夢から覚めることを、それがなしうる社会システムを構想した。*ミルの説いた「自由」の意味については、後述を参照

旧来の経済学者たちは、文明の進歩の途上における必要な一段階と人生の究極の理想状態とを取り違えたのであって、「人間の精神が粗野である限り、それは粗野な刺激を必要とする」のであって、古代や中世では戦争に勝つこと、近代では富の獲得が人類のエネルギーを動員する目標として最も有効であったが、

富が力であり、できるだけ富裕になるということが万人の野心の対象となっているかぎり、富を獲得する途が万人に偏りや差別なしに開かれているということは、最も次期時宜を得たものである。けれども、人生にとって最善の状態はどのようなものかといえば、それは誰も貧しい者はおらず、そのため何人ももっと富裕になりたいと思わず、また他人の人たちの抜け駆けしようとする努力によって押し返されることを恐れる理由もない状態である。

産業上の技術さえも、従来同様熱心にかつ成功的に研究され、その場合における唯一の相違と言え、産業上の改良が一人富の増大という目的のみ奉仕するという事止めて、労働を短縮するという、その本来の効果を生むようになる、ということだけとなるだろう。

* ここまでのまとめは、杉原四郎氏の本を参考にしている。

ミルは「自伝(1873年)」（村井章子訳 みすず書房）で、自分の考えについて次のように述べている。思想的発展の第三期の「この時期には二人(ミルと妻のハリエツト)の成長は歩みを一つにし、私の思想は幅が広がり、奥行きも増していた。」

…だが、第三期の私たちは、かつての私のように、民主主義を信奉しなくなる。これほどお粗末な教育が続く限り、大衆の無知を恐れねばならないと考えたためだ。とりわけ大衆の利己心と無慈悲さに私たちは懸念をつのらせた。二人が理想とする究極の社会改革は民主主義をはるかに超えたところにあったから、分類するなら明らかに私たちは、いわゆる社会主義者に該当しただろう。たしかに個人の抑圧が大方の社会主義制度にはつきものであるとして、強く批判はした。それでも私たちが望んだのは、社会が有閑階級と労働者に二分されない時代だった。そこでは、働かねば食えないのは貧困層だけではない、ひとしく万人がそうである。労働生産物の分配は、生まれという偶然に今日のようにはなはだしく左右されるのではなく、広く認められた公正な原則に基づいて争わなく行われる。自分一人の利益のためではなく自分が属する社会で共有される利益のために身を粉にして働くというあり方は、そこではもはや不可能ではない。少なくとも、不可能とは考えられていない—そういう時代が来ることを、期待したのである。このような未来には、地球上の生産資源を万人が共有し有働の利益を万人平等に分配する仕組みと、個人の行動の自由を最大限に保障する理念とをいかに融合させるかが社会の課題になる、というのが私たちの認識だった。その一方で、では具体的にどのような制度すればこうした目的をうまく達成できるか、またそうした制度はいつ頃実現できるのか、といった点についてまだ見通しが立っていないことも、十分わきまえていた。ただし、一つはっきり理解していたことがある。それは、社会改革を可能にし意義あるものにするためには、労働者階級を構成する無学な大衆と大方の雇用主のどちらにも、人格面の改善が必要だということだ。これまでのように私利私欲だけを考えるのではなく、人類のため、少なくとも公ため社会のためにも働き助け合うことを、実践を通じて双方が学ばなければならない。人間はその力を元来持ち合わせている。…人間の本質的な何かは変化を妨げているわけではないのである。今日では何をする時でも公共の利益を考える気持ちがひどく弱い、もともと強い公共心をもてないからそうなったとは思わない。一日中自分の得にな

りそんなことばかり考えていて、公共の利益を考える習慣がないから、そうなのである。今は日々の営みで利己心だけが動くようになってきているが、公共心が目覚めさせられ、公のための行動が称賛されて私利のための行動が蔑まれるようになれば、ごく普通の人にも強い自己犠牲の精神と献身的な努力とを呼び覚ますことができるだろう。頑固な利己主義が今日の社会の特徴と言えるほどまでに深く根付いたのは現行の制度が何かにつけてそれを助長しているとしか考えられない。そしていくつかの点では、近代の制度の方が古代よりもその傾向が強い。個人が公共のための無償の奉仕を要求されることが、昔の共同体に比べると今日ではずっと少ないからである。私たちはこのように考えていたが、自己の利益に代わるものを示せず、その見通しすら立っていないのに、社会における行動誘因としてこれを性急に捨て去るのが愚かだということも分かっていた。

そこで、ミルは、この当時試行されていた「生産消費組合」の活動に期待した。でも、それは、国家行政あげての産業発展をしようとする国民国家間競争・対立の中で、この試みは発展することができなかった。軽工業段階ならば協同組合で運営できても、大きな資金と組織力のいる重化学工業では、とても太刀打ちできなかった。

*ミルの社会主義は、革命と言うより進化と理解した方がよさそうである。もちろん武力革命など目指していない。今とは異なる別の社会へと向かうためには、国家権力の掌握で事が済むものではないから。

.....

私たちは、まず、今のままでは、自己利益も生存も危ぶまれる事態となることを、より明瞭に提示していくことをしなくてはならない。中西様の本には、このことが明瞭に書かれている。

そして未来の「縮小社会」構想としては、

- ①公共の利益の追求が称賛される社会であること、しかし、これまでの社会主義国のような政治体制は大きな問題がある。
- ②自己利益追求＝公共の利益となりえるよう条件の整備をしていく社会であり、
- ③また、自己利益の追求をしても、それが結果としては大きな悪とはならない社会システム、を構築することであろう。

★でもその時、自己利益と自己所有についての個々人への配慮を否定してはならない。そこに、個人的自由の活躍する場が宿っているのだから、これを全面否定ではなくして、その在り方について構想しなくてはならない。